

今回は、二葉館の赤い屋根瓦についてご紹介します。

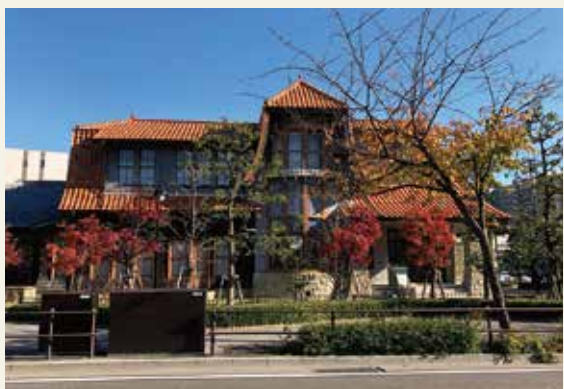
二葉館の1階展示室2には、大正時代の二葉御殿(当時は貞奴と桃介の邸宅)が描かれた風景画の衝立(ぶたせ)があります。周りの黒っぽい屋根の家々に比べて、その赤い屋根瓦の大きな家は、高台に建てていたこともあり、二階目立つ存在であったことがうかがえます。この邸宅を設計施工したのは、その頃洋風住宅を専門としていた「あめりか屋」。当時流行していた洋風建築の形式を取り入れたこの建物は、マンサード

二葉館あれこれ Vol.9 赤い屋根瓦



風景画の衝立(部分)

屋根と半切妻屋根とを組み合わせた、ドイツ風のデザインでした。この建物の外観を特徴づけている赤瓦は、窯業が盛んで有名な愛知県高浜市の神谷角藏商店で製造されました。調査によると、粒度の荒い粘土でできており、千度強の温度で素焼したことが分かっています。作り方は、粘土を踏みながら水分を均一にしたあと、練りながら空気を抜いた粘土の固まりを木型に載せて成型したのだそうです。



現在の二葉館では、1・2階の和室、つまり創建当初の資材を活かした建物部分の屋根に、創建当時の赤瓦が葺かれています(主に車道側)。これらはこれらは前出の二葉荘に残存していた中から、再使用に耐えるものが選別されました。それ以外の瓦は復元の際に、新しく製造されました。

あめりか屋の営業カタログには他に、黒や青、栗色などの種類もありましたが、赤は、特製品として記されて、中でも特別な商品であったようです。貞奴と桃介は何故、赤の瓦にしたのでしょうか。選んだ理由は想像するしかありませんが、ハイカラな二人にお似合いの色だと思いませんか。

IRODORI いろどり

文化のみち二葉館は、関係各所への聞き取り調査や古写真、新聞・雑誌などの文献資料を基に復元されています。今回は玄関付近の古写真についてご紹介いたします。

玄関付近の写真

玄関付近の様子は、貞奴邸の設計施工を行った「あめりか屋」が昭和初期に発行したパンフレット「あめりか屋案内書」に掲載された写真と、昭和12年に前出の川崎舎恒三氏が購入する際に撮影された写真に残されています。



『あめりか屋案内書』に掲載された写真

パンフレットに掲載された写真からは、車寄せの柱の上部に白い色の飾りが付いていたこと、柱と柱を繋ぐ梁があったことと、玄関への石段は4段であったことがわかります。また、左側には大広間の円形ソファ部分の玄関側が写っており、別角度から撮られた写真と合わせることで、全体的様子が明らかになりました。

正面から写された上げ下げ窓も、復元を行う上で大変重要な資料でした。増改



昭和12年に撮影された写真

築時に転用された上げ下げ窓が現存しており、その寸法を基準に他の部分の寸法を割出すことが出来ました。

昭和12年に撮影された写真には大広間にあつたステンドグラス「踊り子」が写っており、復元の根拠となりました。さらに、車寄せの柱下部の四角い形状や柱上部の飾りのディテール、玄関扉のデザインなどもわかります。

古写真以外にもオリジナルと思われる部材が見つかっています。円形に加工された石で、車寄せの円柱の一部に張られていた部材です。表面の加工形状をたどると柱の直径は約90cmであり、産地について調査した結果、長崎の諫早(いさはら)石が一番近い種類であったこともわかりました。このオリジナル部材は現在、建物南側の芝生内に屋外展示されています。



発見された円柱のオリジナル部材

文化のふらり さんぽ みち

「下街道」



「尾張名所図会・伝馬会所札の辻」図モニュメント

二葉館から南東に歩いて10分ほどの代官町交差点周辺は、かつて「佐野屋の辻」と呼ばれていました。名古屋城築城の頃移り住んだ佐野屋という酒屋と味噌屋があつたことから人々にそう呼ばれていたそうです。この交差点の南西に「善光寺道 京大坂道」と刻まれた道標が立てられています。これは国道19号線の前身となつた下街道の道標です。

下街道は日本武尊が東征の帰りにこの道を通つたという伝説が残されている歴史ある街道で、名古屋城下と中山道を結んでいました。

尾張藩が参勤交代の際に中山道へ出るために作られた公式街道が上街道と呼ばれていたのに対し、庶民が使う非公公式の街道だったことから下街道と呼ばれていました。

五街道である中山道の宿場を保護するため、荷物と公人は上街道を通ることが義務づけられ、下街道の通行は禁じられていました。そのため下街道は裏街道の扱いとなり、正式には宿場は設けられていませんでした。

しかし、中山道・上街道ルートは山深い道を19里も行かなければならないのに対し、下街道なら土岐川(庄内川)沿岸の平たんな道を15里で済んだので、禁止されているにもかかわらず、多くの荷物が下街道を通行していたそうです。公人ではない一般の旅行者には規制はなく、名古屋方面からの御岳参

りや善光寺参り、木曾方面からの伊勢参りなどの利用者が多かったため、善光寺道、伊勢道とも呼ばれていました。

下街道の起点となつていた「札の辻」は現在の中区伝馬町通本町交差点の辺りです。この交差点の北西には「尾張名所図会・伝馬会所札の辻」図のモニュメントが設置されています。ここから北へ

5分ほど進み、本町通と京町通の交差点を右折します。そのまま20分ほど進むと「佐野屋の辻」の道標が見えてきます。

「佐野屋の辻」を左折後、平田町の交差点辺りからは、国道の一本西側を通る道が旧街道筋です。しばらく進むと道がほぼ直角に2度曲がっている場所に出ます。これは「枳形」といって、敵の侵入を防ぐために道を鍵の手に曲げて見通しを遮る防衛構造です。

この先の赤塚交差点付近にも防衛拠点となる「大木戸」という関所の役割を果たしていた場所がありました。不審な通行人がいないか常時見張り番がいて、夜10時ごろには通行禁止となつていたので、夜10時ごろには大木戸を超えた先もほぼ国道に沿う形で下街道は続き、春日井市、多治見市、土岐市、瑞浪市を抜けて、恵那市の大井宿手前で中山道と合流します。



佐野屋の辻にある道標

from Archive 書庫棟から 文学ボランティア



今までの経験を活かして、より多くの発見や出会い、楽しみを見つながら作業してもらっています。

具体的な作業は、寄贈品の整理・保管、新規寄贈品の分類・分け・目録作成・データ入力・保管や展示に関わるなどです。書庫棟(通常は一般に開放していません)での作業のため、時には埃にまみれ、本を運ぶ力仕事もあるなか、それでも根気強く積極的に取り組んでいます。

ボランティアの手を介して収まった寄贈品は、折にふれて展示していきますので、是非楽しみにしてください！



書庫棟



2階 展示室5

二葉館の2階にある郷土ゆかりの文学資料室では、開館以来多くの作家や作品などを展示し紹介してきました。それらを除で支えているのが、ボランティアの存在です。

開館当初は、作家・城山三郎(ごんざう)ご本人や、歌人・春日井建のご親族から受けた膨大な数の寄贈品(書籍や資料)の受入作業のため、多くのボランティアが集まりました。開館から14年が経ち、引退などでメンバーが少なくなつたため、先頃ボランティアを募集して新たに

加わりました。新メンバーは、年齢や職業、生活環境も様々です。これまで本や文学に関わつてこられた方もいれば、全く異なる分野で活躍されてきた方もいます。